TOKYO-SAN FRANCISCO ART FESTIVAL'06
IIstening×あなたの言葉を聞く約束

2006.4.1発行

ALL THE NEWS WITH ART AND CULTURE

Tokyo-San Francisco Art Times

4号

■ URL：http://www.tsfaf.org ■ Blog：http://www.tsfaf.org/blog

特集 サンフランシスコに暮らすアーティストの現在性の手法

Interview by Ysohinori Niwa

今回は、サンフランシスコの自宅改造アートスペース667shotwellを運営するクリス・ソラースさんに自身の活動や作品について、そしてアメリカに暮らす作家の現在的なアート活動の在り方を探っていきます。
アーティスト：クリス・ソラース／聞き手：丹羽良徳

Q 667 shotwellはたしか自宅を改造してアートスペースにしているようですが、どのようにして始まったのですか？

StreetClean4 (1997)

A サンフランシスコでは、ドットコムブームが破綻したころ、それまであったアートギャラリーやアートスペースが休業しはじめ、アーティストにとっての機会はしだいに衰えていった。２００１年に、自分のウェブサイトを運営するかたわら、僕は自分の家の住所を自分のホームページとし、６６７ショットウェルを自分の作品だけの場以上のものにしようと決めた。６６７ショットウェルが始まったのは２００１年９月７日、アメリカ人の心理が大きく転換をむかえる数日前のことだった。６６７は当初、オンライン・プロジェクトだけを展示しようとしていたが、アーティストと観客が地元で気楽に展示をしたり、見に行ったりする場が、公共的または商業的な枠組みの外で必要とされていることにすぐに気がついた。アートは必ずしも美術館に収められるものではなく、家庭的な場所、人々の家に収められることもある。ソファの上に素敵な絵があったり、バスルームに素敵な写真があったりするかもしれない。６６７ショットウェルで僕は、家の中にあるアートや家の建築的な面への関心にもういちど注意を向けてみたかったんだ。６６７をヴァーチャルワールドの中だけにとどめたくなかった。http://www.667shotwell.com/Projects.html

Q 数年前に667 shotwellで一度だけ僕も作品を出品したことがあるのですが、展覧会や各プロジェクトはどのように決めて運営しているのですか？

A 一年間連続でショウをしたので、サンフランシスコにおいて定評のあるスペースになった。僕はこれでとても疲れたし、自分のアート実践から遠のいてしまった。それからは、自分のプロジェクトの合間や、誰かアーティストがサンフランシスコへやってくるときにショウをすることにしている。自分の家に毎日誰かがいて、作品を見ているという状況は厳しい。オープニング以外は、展示を見にきたいという人に予約をとってもらって調整している。そうなると、観客が家まで来る来ないにかかわらず、アーティストにとってウェブは展示スペースとなる。

丹羽さん、きみの参加した家でのショウは"While I was Away."(留守にしていた間)だった。夏の終わりに僕が家に戻ってくるまで、家に手紙やアートが山と積まれているというアイデアが気に入ったんだ。きみが送ってくれたDVDは僕のベッドルームの大型テレビで流されていて、見に来た人は床の上に座ったり、ベッドに寝転がったり、僕がショウのたびに作るホームメードのポップコーンを食べたりしていた。667に来ると、家の中にはアーティストたちの過去の作品の名残を見ることもできる。そのすべては今までに行われた大きなプロジェクトに言及しているんだ。入り口を入ると、Lee Waltonが2004年に書いた"Everything in this House Has Been Moved to the Left"(この家のすべてのものは左に移された)がある。ホールにある６６７の住所は、Mark Shunneyが近所の自動車整備工場に頼んでペイントさせたものだ。ブルー・ルームの天井にはMartin Durazoによるトイレの吸引具がある。ドアの枠に描かれた小さな蜂はAlison Pebworthによるもので、それは彼女が子供の頃に受け継いだ1700年代の表彰用リボンを誰が手に入れるかを決めるために行われた盛大なごみ集め競争の一部だった。それに、Jerome Waagが2004年1月1日に行った投票による民主(党)的な食事についてのレシピを描いた黒板など。これでもほんの一部だ。

Cityscapes(2000)

Q クリスさんはパフォーマンス作品が多いのですが、その背景やパフォーマンス以外の作品についても聞かせてください。

A 小さい頃からよく絵を描いていた。大学に入ってからは彫刻を勉強し、だんだんとアクションを念頭においたオブジェを作るようになった。そのあたりから、人前でアクションを用いたパフォーマンスをするようになった。ごみを拾って洗い、それをまた道に戻す "Street Clean 1997"という作品、街中サッカーボールを蹴っていく"Cityscapes 2000"、僕が偽イエス・キリストであるJ.C.という名前のヒッピーになりかわり、ヘイト・アシュベリーから出発して最後は魔法のじゅうたんに乗るというコースで、サンフランシスコのウォーキングツアーをするという、"Come Walk With Me 2002"などなどと。パフォーマンス以外で最近のものなら、1月にサンフランシスコのSouthern Exposureギャラリーで展示していた、"SUV RUB 2005"というタイトルのものがあって、これはフォード・エキシビションＳＵＶの車体全体を摩擦するというものと、手作りの巨大ゴミ袋(24×35フィート)の中で87分間におよぶ "Pile of Trash"のビデオを上映するというものだった。

Q 最後に、今後の活動のプランや現在行なっているプロジェクトなどについて教えてもらえますか？

JC_Come_walk_with_me_tour (2002)

A 今、ブッシュ政権のエネルギー省に勤める僕の姉妹についてのドキュメンタリーにも取り組んでいる。このビデオは2004年の秋にワシントンＤＣを訪れたときに撮り始め、彼女をはじめ、彼女の友達、僕の家族に対する電話およびビデオでのインタビューが収められている。父は神への信仰を新たにしてブッシュを支持し、母はレズビアンだから、2004年の大統領選挙の際の衝突のスナップショットでもある。このビデオはドキュメンタリーの間に、僕の代わりとなるべく僕のアートビデオが挿入されており、左翼と右翼がこの別のスペースで混交することになる。(※)

訳注） ※.について
ブッシュ政権(共和党)＝保守派、クリスチャン、白人至上主義、右、というのに対して民主党はリベラル、左、なので、クリスの両親は父＝クリスチャン、共和党支持、母＝同性愛者、リベラル、民主党支持という意味になります。04年の総選挙の時にも顕著でしたが、東部のニューヨーク、ニュージャージー、マサチューセッツなどの州およびカリフォルニアなどは「青色」の州で、民主党の勝利でしたが、アメリカの大部分の州は「赤」の、共和党支持という結果になりました。一般的にアーティストというと民主党支持、という構図があります。ちなみにサンフランシスコは伝統的にリベラルな街で、みんなブッシュが嫌いです。

クリス・ソラース

インディアナポリス生まれ、サンフランシスコ在住アーティスト。2001年より、667Shotwellのディレクター兼キュレーターになる。ヴィデオアートやパフォーマンスの分野で多くの作品を制作している。現在は、ブッシュ政権のもとで働く姉妹に関するドキュメンタリービデオを制作している。

English Version Features "Present technique of artist who lives in San Francisco"

Interview by Ysohinori Niwa

Today we will ask Chris Sollars who lives in S.F, and run own art space 667 shotwell about his art activity and his idea.
Interviewer : Yoshinori Niwa Artist : Chris Sollars

Q I have participated in a show at 667 Shotwell before. Can you explain what makes 667 Shotwell unique?

A In San Francisco right around the time of the dot.com boom and bust some of the remaining art galleries and spaces were closing and opportunities for artists were dwindling. In 2001 while working on my own website I decided to have my home address be my home page and to have 667 Shotwell be more than just a site for my own work. 667 Shotwell officially launched Sept 7, 2001 days before a shift in the collective American Psyche. 667 was originally only going to have online projects, but it wasn't long before I realized how important artists and viewers locally needed an informal space to exhibit and view art outside an institutional or commercial setting. Art doesn't always end up in museums it often ends up in the domestic space, in people's homes. You might have a nice painting over the couch or a photo in the bathroom. With 667 Shotwell I wanted to readdress some of the concerns of art in the home and a house's architectural concerns. I didn't want 667 to just exist in a virtual world. http://www.667shotwell.com/Projects.htm

Q How you schedule and manage shows or projects happening there?

SUV RUB1(2005)

A I did the shows solidly for a year so that it became an established space in San Francisco. This wore me out an took me away from my own art practice. Since then I put together shows in between my projects or when artists from outside San Francisco come to town. Its hard to have everyone in your home everyday looking at the work. Outside of openings I have people interested in the shows arrange appointments to see the exhibitions. Then the web provides a space for these artists to show regardless if viewers make it to the house. Niwa, the exhibition you participated in at the house was "While I was Away." I liked the idea of letters and art piling up at the house until I got back at the end of the summer. The DVD you sent played on the big TV in my bedroom while viewers sat on the floor, lounged on the bed, while eating homemade popcorn that I make with every show. Sometimes if you come to 667 there are remnants around the house of past works by the artists. Each has a reference to a larger project that took place. As you enter, writing on the wall states "Everything in this House Has Been Moved to the Left" by Lee Walton 2004; 667 address numbers in the hall that Mark Shunney had painted by local automotive body shops in the neighborhood; there is a plunger on the ceiling in the blue room by Martin Durazo; small bees painted in door frames by Alison Pebworth which were a part of a large scavenger hunt contest to find a winner for a 1700's award ribbon that was passed to her as a child; and a recipe chalkboard of a democratic meal voted on by the people that was held at the house on Jan 1 of 2004 by Jerome Waag; to list a few.

Q I understand that your main focus is performance. Let us know what you have done before.

Pile_of_Trash (2005)

A I grew up drawing a lot and when I got to school I studied sculpture and slowly started making objects that were involved in actions. From there I started performing these actions in public spaces. These actions have included picking up trash, washing it, and putting it back Street Clean 1997, kicking a soccer ball through city streets Cityscapes 2000, and as a pseudo Jesus hippie guy named J.C. I have lead a historical walking tour of San Francisco that starts at Haight and Ashbury streets and ends on a magic carpet ride; Come Walk With Me 2002. Other recent non-performances include a rubbing of an entire Ford Exhibition SUV titled SUV RUB 2005 which showed in January at Southern Exposure gallery in San Francisco, with a massive garbage bag (24' x 35') I constructed that housed the Pile of Trash video installation playing 87 minute video.

Q Let us know about what motivates you to create a new work. Also, let us know your future plans.

A I am also currently working on a documentary video on my sister who works for the Bush Administration in the department of alternative and renewable energy. I started shooting this video in fall of 2004 with a visit to D.C. with a series of phone and video interviews with her, her friends, and our family. My father has renewed faith in God and supports Bush and my mother is a Lesbian, which is a snapshot of the conflicts of the 2004 U.S. Election. This video will take the form of a documentary film interjected with a series of my art videos standing in for me, blending the Left and Right together into this other space.

Chris Sollars

is a San Francisco based artist born in Indianapolis.BFA Rhode Island School of Design 1998; Residence at Skowhegan school of Painting & Sculpture 1998; M.F.A., Milton Avery Graduate School of the Arts at Bard College 2006.Director, and curator of 667Shotwell in San Francisco since 2001. Currently working on a documentary video on his sister who works for the Bush Administration.

特集 美術大学！

「美術」を勉強するということ text by 斎藤朝子

美術教育とは何か。
毎年、美術大学を受験する人、卒業する人。卒業して、10年経つ人、30年経つ人、亡くなった人。そして、ずっとアートに関わっている人は一体どれ位いるのか。

イギリスにて6年間美術教育を受けた尾角典子さんに、インタビューをしてきました。

・Chelsea College of Art 大学のFine art - Media科（03年卒業）
まず、科の名前にARTとついているので、美術史的なものをかなり学びました。そして、主にコンセプトを教授と話し合います。生徒も、かなり美術史そのものが好きな生徒が集まっており、技術的には未熟であってもコンセプトをとにかく教授と話し合っていました。
・Royal College of Art 大学院 Animation 科（05年卒業）
卒業後アニメーション制作会社で指揮をふれる監督を育成するコースの様な所が有るのでアートよりだけど商業ベースも入っていたのかもしれません。だから採点方法ではもちろんコンセプトがちゃんと作品に出ているかという事も重要なポイントとして見ていたけれどもアニメーションとして作品が機能しているかという技術面も重視していました。
どちらにも共通している事は、ただ技術力を見ているわけではないという事です。教授達が、自分はこの子を育てられるかどうか、という事も視野に入れています。「この本を読みなさい」とか「〇〇科の教授と話してアドバイスをもらってきなさい」などと具体的なアドバイスをしてより成長させられる子を試験の時に見極めるようです。これは決して、受験生が「あの大学に入れなかった・・・」というネガティヴな考え方ではありません。
また、「ヨーロッパは美術の中心」と思っているイギリス人は多いと思います。アメリカに対して、白人の文明が始まってからアートが流れ込んだという意識があります。それは日本に対してもそうかもしれません。最近、帰国したのですが少し前まではロンドンに美術関係者（アーティスト、ギャラリスト、キューレター、留学など）が集まってきていたのですが今はベルリンに流れているようです。

私もイギリスに興味を持ち始めた時、大学を調べ学科の細かさに驚いた。芸術学科の中にも、美術史、哲学史、社会史、、、と日本とは比べものにならない程だった。オックスフォードの大学（美術大学ではなく、総合大学）の生徒と話した時、「インターネットアート科で作品を創っている」と言われ、はっきり言って意味が分からなかった。どんな作品を創っているのか、見当できなかった。彼らは、いつもミーティングをしていてその中に教授が必ず一人いた。ギャラリーには、教授と生徒の作品が隣に並んでいた。はっきり言ってクォリティーは相当低いが、コンセプトを語らせたら日が暮れた。

美術を4年間、大学で勉強した。今、一番好きなアーティストは島袋道浩さんとヨーゼフボイス。彼らを知ったのは、大学の外で勉強した独学の中だ。
わたしにとっての美術教育とは、何だったのか。

現在を生き抜く為に text by 丹羽良徳

「方法理論」という言葉を聞いたことが無かった、もちろん僕の通っていた多摩美術大学でもそのような授業は無かったと思う。この言葉を聞いたのは、知り合いのビデオアーティストでサンフランシスコアートインスティテュート卒の人からだ。
彼にアメリカの美術大学のことを少しでも知ろうと思ってインタビューしているときだった。彼によれば、「方法理論」米語名は"Methodology"は芸術制作をして ゆくために必要な理論・思考方法についての学習で、３人のレクチャラーが毎週代わる代わるレクチャー、その後小さいグループに分かれてのディスカッションがあり、授業はきわめて文学、哲学、社会学的な要素が強いものだといいます。彼曰く、サンフランシスコではジェンダーについての 現実的観察と考察が自然に身についてしまうのだが、さらにそれを押し進めて理論的（？）に社会における女性／男性像を映画という模像を通じて考察するのは興味深かったと述べています。

芸術に関わらず、欧米の大学と日本の大学の違いはディスカッションだと良く言われます。さらに簡単に言えば、考える訓練が僕らには足りない。僕も学校の授業なんかでは、パフォーマンスなんかやっている奴なんか無視だ！なんて言わんばかりで討論にならないもどかしさで（理由は簡単。演劇と映像の教授しかいないから）僕は、学校外の同時代のアーティスト達から学ぶことの方が凄ろリアリティーのあることで、意味のあることだと信じていました。それはそれで、なんだか虚いしことでしたが、僕は学外でヨーロッパの現代パフォーマンスアーティストやアジア諸国の作家なんかと世間話をしたりするうちに、なんとなく芸術の意義を教えられた気がします。これが多摩美で無かったは残念なことですが、僕はそれから一人のアーティストとして活動する方法論やエネルギーをもらって、実際に在学中にヨーロッパのギャラリーなんから招待状をもらってパフォーマンスを行ないに飛行機に乗ったりしたのです。
学生が発言して討論する自由な場が今の美術大学に一番必要ではないのかと、どうも思えてならない。時代を生き抜く為に学生が主体になって、討論をくり返し、タフにならないと面白くない。もっと社会的な意義を見いださないといけない。それは学校だけが悪いのではなく、僕たちがどうにかしないといけないところかも知れない。その為にはアーティストが主体的に世界を学び、行動することにあるのではないか。ある作家に聞いたところ、アーティストは作品を作ることよりも、討論することに夢中にならなければいけないと教えてくれた。

僕の話をすれば実際のところ、学部の3年生位からは僕は映像も演劇もやらない！と宣言して、パフォーマンスやプロジェクト型の作品しか創らなくなりました。3年生の時は「抜け毛プロジェクト」で1ヶ月間自宅の抜け毛を採取し続けて、一本づつ紙に貼付けて、コメントする作品を作り、最後はその抜け毛をアロンアルファで繋げて多摩美の校舎を越える「抜け毛は校舎を越える」という作品に発展しました。その冬には「水たまりAを水たまりBに移しかえる」という路上の水たまりを口で吸い上げて別の水たまりにすべて移しかえるというパフォーマンスを開始しました。この作品は現在も続けていて今後も継続するものです。卒業制作は「ヤンキー養鶏場」と言って鳥インフルエンザが大流行した日本を題材に実際に近所の鶏小屋に6ヶ月間通い鶏に黒板を使って、イラク戦争を説いたりするという作品を創りました。思い返せば、良くも悪くも「映像演劇学科」とはほど遠いアーティストになりました。

丹羽良徳 Yoshinori Niwa：

1892年愛知県生まれ。2005年多摩美術大学映像演劇学科卒業。肉体的かつ社会的なパフォーマンスやゲリラ的に出現する都市でのアクションを用いた作品を作る。

Tokyo-San Francisco Art Festival' 06プレイベント「なぜ、このようなフェスティバルを行なおうと思ったのか」

日時：5/28（日）
会場：Out-lounge
18:00-22:00

入場料：500円 （1ドリンク、軽食付き）
内容：国際インターネット電話での対談、展覧会説明、ビデオ上映、パフォーマンスなど
主催：東京ーサンフランシスコアートフェスティバル06東京実行員会
問い合わせ：info@tsfaf.org 又は 090-4187-0362

〒170-0005
東京都 豊島区 南大塚 3 - 39 - 9 高津ビル5F
／JR大塚駅徒歩5分
T&F/03-3987-0087
http://www.h5.dion.ne.jp/~olounge/)

東京ーサンフランシスコアートフェスティバル'06
IIstening×あなたの言葉を聞く約束
＜世界の現在を見る現代美術による国際交流展＞

＜東京展＞
日時：２００６年7月29日（土）～8月5日（土）
9:30-17:00
会場：近日公開
主催：東京ーサンフランシスコアートフェスティバル'06
東京実行委員会
助成:財団法人朝日新聞文化財団
後援:現在申請中

●出品作家：
丹羽良徳、斎藤朝子、和志武礼子、松場昭典、近藤恵介、岩田とも子、Kurt Bigenho、Charlie Callahan、Joshua Churchill、Renee Dolores、Marisa Jahn、Jos Pollard、Chris Sollars

＜サンフランシスコ展＞
日時：２００６年12月8日（金）～12月16日（土）
時間未定
会場：The Lab 他
http://www.thelab.org
主催：東京ーサンフランシスコアートフェスティバル'06
SF実行委員会
後援:現在申請中

●概要

新聞やblogといったツールを使い、東京とサンフランシスコの作家達がお互いに意見を交換し合いながら、自らの立場や問題点を発見し、成長し、展覧会を行ないます。それは単にアーティストだけでなく、新聞やブログを使うことによって一般の観客を巻き込んだ形で意見を公表したり、アンケートをとったりしながらゆっくりと進めていきます。その為、約一年という準備期間を設け、その間は展覧会の準備と平行してお互いを知り合うという展覧会へのプロセスを踏んでいくことになります。国や言語、宗教、生活スタイルも違う両国の間ではどのようなディスカッションが生まれ、どのような解決方法を生み出すことでしょうか。私たちは単なる作品展示の為に展覧会を組織するのではなく、「作品展示するということはどういうことか」という問いに意識的になり、アーティストという立場を考え、芸術を考える為の展覧会を組織したいと考えています。その結果として東京とサンフランシスコの各都市1週間ずつの展覧会を行ないます。

Tokyo-San Francisco Art Times #4
2006.4
発行：東京ーサンフランシスコアートフェスティバル'06
東京実行委員会(代表：丹羽良徳)
〒152-0003 東京都目黒区碑文谷5-7-11グリーンウッド101
tel:090-4187-0362 E-mail:info@tsfaf.org URL:www.tsfaf.org
Printed and Distributed in Japan.
Cover art works by Chris sollars

＜相互リンク募集！＞
東京ーサンフランシスコアートフェスティバル'06では相互リンクを募集しております。ご希望の方は、info@tsfaf.orgまでどうぞ。

＜ボランティアスタッフ募集＞
Tokyo-San Francisco Art Festival'06ではボランティアスタッフを募集しています。詳しい内容はinfo@tsfaf.orgまでお問い合わせください

IIstening
TOKYO-SAN FRANCISCO ART FESTIVAL'06
IIstening×あなたの言葉を聞く約束